連載Ⅱ
ホスピタリティーの
手触り 81

ホスピタリティ産業の歴史を生きた家

旅行作家　山口　由美

片付けは捨てることにあらず

最近、「実家の片付け」をテーマにした雑誌の特集などを目にすることが多い。

そうした状況は、いつの時代もあったはずなのに、なぜ今、注目されるのか。平和で、それなりに豊かな時代が半世紀以上続き、日本の各地でモノをため込んだ家が、世代交代の時期に直面しているのだろう。そして、我が家にもついに「実家の片付け」をしなければならない時がやってきた。

私が生まれ育った家は、箱根の大平台にある。箱根登山鉄道の隣駅にある宮ノ下の富士屋ホテルで、最後の同族経営社長であった祖父、山口堅吉が建てた家だ。堅吉は、創業者の次女、貞子の婿となり、一九一二年（明治四十五年）から富士屋ホテルの経営に参画した。家を建てたのは、一九三〇年（昭和五年）のことである。妻の貞子は、昭和七年に亡くなり、二年後の昭和九年、後妻の千代子をむかえた。堅吉が五十三歳の時、千代子との間に生まれた一人娘、裕子が私の母である。その婿が父、祐司であり、裕子は、貞子が亡くなったのと同じ三十九歳で亡くなると（ホラー小説のような話だが）、父は後妻の順子をむかえた。

「実家の片付け」をすることになった大平台の家。
富士屋ホテルと同じ棟梁による建築だ

すなわち家は、四人の女主人と、二人の主によって住み継がれたものである。富士屋ホテルの創業者亡き後、実質的な経営を引き継いだのは、長女の婿である山口正造だった。堅吉は、一九四四年（昭和十九年）に正造が亡くなった後、社長となった。義兄弟であった二人は、実は同世代だった。年齢は三歳、婿入りした年も四年しか違わない。ホテルの事業に関わった年数は、長生きした堅吉のほうがはるかに長く、ゆうに半世紀を超える。それなのに、富士屋ホテルの歴史においては、容貌も性格も華やかで、積極的に事業を拡大した正造ばかりが、創業者に次ぐ主人公として語られてきた。

実際、私も『箱根富士屋ホテル物語』を書いた頃、実の孫でありながら、堅吉のことは過小評価していた。だが、彼が富士屋ホテルの経営を引き継いだのは、戦争末期から終戦後の進駐軍による接収という、日本のホスピタリティ産業、いや日本の国そのものが危機に立たされた時期であったことに、やがて気づかされることになる。

高校入学で上京した私が実家で暮らしたのは、十五年ほどでしかない。そんな私がこの家と積極的に関わるようになったのは、数年前の漏電騒ぎがきっかけだった。工事のため、天井をはずしてみると、そこから貞子が亡くなった頃に封印したまま、長いこと人目に触れずにきた資料が出てきたのである。竣工年を知ったのもその時だった。

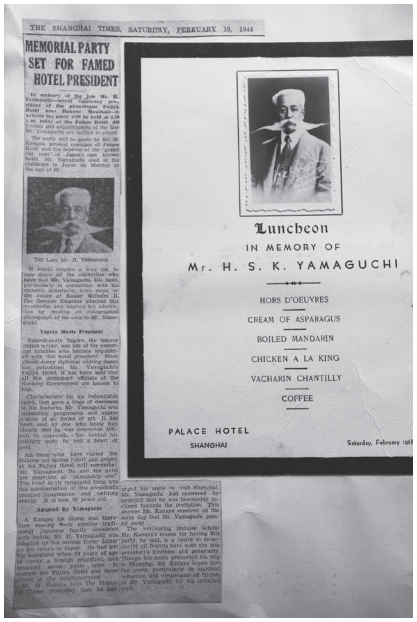
家の設計図や貞子の葬儀の記録と共に富士屋自動車の経営資料が発見された。富士屋ホテルの自動車部門である富士屋自動車は、当時、堅吉が実務を任されていたのだが、貞子が亡くなる前年、箱根登山鉄道の自動車部門と合併している。箱根の交通史の一端を物語るこれらの資料は、その後、箱根町立郷土資料館の特別展で展示された。このやりとりを通して町の文化財担当者と、家を登録文化財にする話も進んでいった。何の変哲もない古ぼけた家だと思っていたが、洋館でありながら、これみよがしの派手さがないところが長所だという。その評価は、義兄の正造とは正反対に容貌も地味で、我慢強さと几帳面が取り柄の堅吉の人となりそのままで、なんとも感慨深かった。

文化財にする以上は、何らかのかたちで人の目に触れるものにしたい。また相続するにあたり、維持費くらいは捻出しなければならない。いろいろと検討した結果、日帰りスパを開業することにした。その改装工事のために、実に八十四年ぶりの「実家の片付け」となったのである。大量のモノがあふれている、というのは、「実家の片付け」に共通のことだろうが、我が家の場合は大半が本や資料だった。しかも、それは一見ゴミに見えて、最後の同族経営社長だった祖父、国際興業になってからの富士屋ホテルを支えた父、それぞれの人生そのものであり、また日本のホスピタリティ産業の歩みとも符合するタイムカプセルだった。

父がため込んだ雑誌や資料からは、高度経済成長時代の、さらにはバブル経済時代の、熱っぽく華やかだったホスピタリティ産業の繁栄が立ち上がってくる。今はなきホテルのパンフレット、幻と消えたリゾート計画、バブルの城と揶揄されたリゾートホテルの開業記念品として大切にとってあったのは、高価なビンテージワインだった。祖父の残したものからは、私が知らない、遠い時代の歴史がこぼれ落ちる。満州国と刻まれた勲章、戦時中、外国人が多く滞在していた富士屋ホテルに外務省の出先事務所があった頃の祖父への任命状。

驚いたのは、義兄の正造が亡くなった際、上海のホテルで開催された追悼パーティーの記録だった。日本占領下の上海で、敵対していたはずの外国人と日本人が席を同じくする写真は、不幸な国際情勢にあっても、ホテリエとして愛された正造の人となりを伝え、それが今ここにあることに、義兄を敬っていた祖父の愚直な几帳面さが忍ばれるのだった。

（やまぐち　ゆみ）


THE SHANGHAI TIMES, SATURDAY, FEBRUARY 10, 1944

MEMORIAL PARTY SET FOR FAMED HOTEL PRESIDENT

Luncheon
IN MEMORY OF
Mr. H. S. K. YAMAGUCHI

HORS D'OEUVRES
CREAM OF ASPARAGUS
BOILED MANDARIN
CHICKEN A LA KING
VACHARIN CHANTILLY
COFFEE

PALACE HOTEL
SHANGHAI

正造の死を報じた新聞記事と当日のメニュー

上海のパレスホテルで開催された追悼パーティー